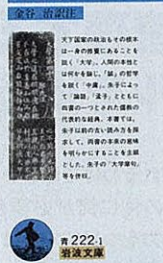


## Step2 原文から感じ取る

理解を深める補足の1冊

### 大学・中庸



#### 『大学・中庸』

金谷 治訳注  
岩波文庫 / 819円

「大学」と「中庸」はともにリーダーとしての道や徳のあり方を示した書。「論語」「孟子」と並んで「四書」と言われる。その2つが1冊にまとめられたのが本書。「原文と直訳からなり、細かな解説はついていないので多少難解かもしれないが、ステップ1を経ていけば楽しめる。心動かされた箇所に線を引ながら、じっくり味わってほしい。



#### 選者 瀬口清之さん

Kiyoyuki Seguchi  
キャンブローバル戦略研究所 研究主幹

日米中間係と中国経済が専門。1982年東京大学経済学部を卒業し、日本銀行に入行。香港留学を経て88年から中国・アジア経済を調査。米ランド研究所フェロー、北京事務所長、国際局企画役を経て2009年4月から現職。仕事の傍ら、2001年から田口佳史さんに師事して中国古典思想を学び、常に実践を心がけている。

## 中国古典がさらに身近になるおまけの4冊



#### 『マネジメント [エッセンシャル版]』

—— 基本と原則 ——  
P・F・ドラッカー著、上田博生編訳  
ダイヤモンド社 / 2100円

現代経営のバイブル書だが、「『論語』を中心とする中国古典に通じる部分が多く、驚かされる」。例えば「利益は必要であるが、企業活動にとっては目的でなく条件。自らの組織に特有の使命を果たすのが企業の目的である」といった記述は、「論語」の「先義後利」と同義ととれるという。



#### 『西郷南洲遺訓』

—— 附・手抄言志録及遺文 ——  
山田清斎編  
岩波文庫 / 504円

中国古典を学び、それを原動力として明治維新の大事業を成し遂げた西郷隆盛の遺訓。「実際は彼の理想はもっと高く、目指すところの半分も実現できなかった悔しさがじんじん伝わってくる。現代語訳がないので難解だが、最初の19ページだけでも読んで、彼の熱き想いを感じてほしい。

## 企業人としての心構えや、企業のあるべき姿を学ぶ

### 『論語の一言』

田口佳史著 / 光文社 / 1680円

「競争」「リーダーシップ」「苦境」「成功」といったテーマ別に、主に論語から抜粋したフレーズの意味やその解釈の仕方などについて詳しく解説。「自分自身の生き方の物差しにもなるし、『先義後利』（先に“義”を求めれば利益は後からついてくる）などマネジメントに直結する格言も多数取り上げられ、企業戦略を考えるうえでも大変参考になります。

## うまくいかない時、落ち込んだ時の対処法を学ぶ

### 『老子の無言 人生に行き詰まったときは老荘思想』

田口佳史著 / 光文社 / 1680円

何をやってもうまくいかない下り坂の時には、やり方を180度変えて革新する必要があるという「老荘思想」について書かれた書。著者が「現代の老荘思想実践者」として注目するイチロー選手の事例などにも触れている。「心に余裕がなくなった時に老子の思想に触れると、自分の原点を思い出して、明るく清々しい気持ちを取り戻せます。

## 具体的な戦略の立て方を学ぶ

### 『孫子の至言 険しい坂を乗り越え、己の人生に勝利するために』

田口佳史著 / 光文社 / 1575円

「勝ってから戦うのが本来の順序」（戦う以前に、頭脳の限りを尽くして策を練る）、「敵の前に姿を見せない」（守る時は姿を隠し、攻める時は敵の状態を空から眺めているがごとく把握する）など、戦略・戦術の立て方を非常に具体的に指南するのが孫子だ。「企業戦略だけでなく、人生をどう切り開いていくかのヒントも得られます。



### 『菜根譚』

中村璋八、石川力山全訳注  
講談社学術文庫 / 1313円

中国明代末期の書。仕事や人生の困難に立ち向かう心のあり方などについて説く。「ちょっと心を落ち着けたい時に読みたくなる書。年に1~2回、出張時のカバンの中に入れて読み返しています。1文が短いので、脈絡なくページをめくり、目についたところを眺めるという気楽な読み方ができます。



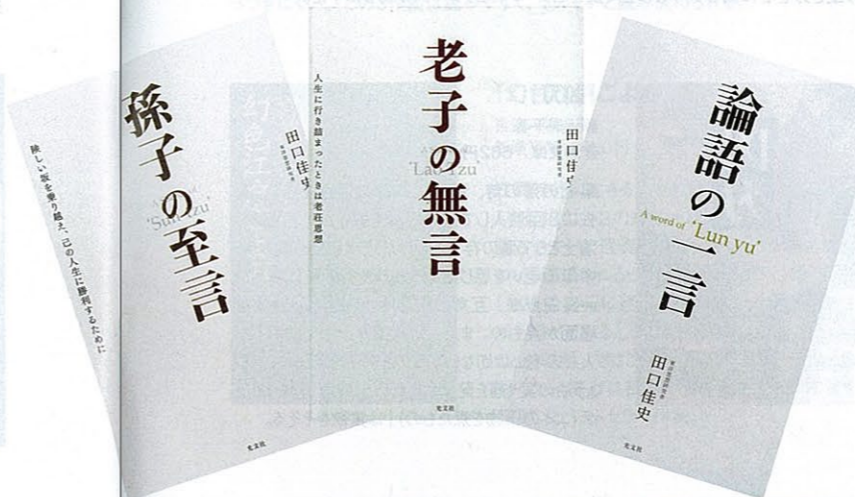
### 『言志四録 (1)~(4)』

佐藤一斎著、川上正光全訳注  
講談社学術文庫 / 1050~1155円

江戸末期の儒学者で西郷隆盛の師でもあった佐藤一斎の語録集。4巻に分かれる（写真は1巻）。「これも『菜根譚』に似てかしまらずに読めるので、出張時のお供に最適。「自分の心を静かに保つことができれば、いつでも青空が見える」といったメッセージを受け取ることができ、励まされる。

## Step1 親しむ・慣れる

すぐに役立つ基本の4冊



### 老子の無言

### 『リーダーの指針「東洋思考」』

田口佳史著 / かんき出版 / 1680円

「論語」「大学」といった中国古典のみならず、幕末の思想家・吉田松陰の「士規七則」や陽明学者・山田方谷の『理財論』といった、日本で開花し国家発展の礎となった古典も取り上げ、東洋的な思考をベースにしたリーダーのあり方を考察。「まだ役職に就いていない若い人にこそ、ぜひ読んでほしい。今後の仕事や生き方の指針になるはず」（瀬口さん）。

# 中国古典

## 「ぶれない自分」を作り 仕事や生き方のヒントに

人生に迷った時、明快な答えを示してくれるのが中国の古典。上り調子の時は『論語』、落ち込んだ時は『老子』など、目的別の読み分け方や、無理のない読み進め方を紹介。

選者：瀬口清之さん(中国経済研究者)

幕末の若き志士たちの明治維新に突き進む原動力となり、今も多くの企業トップたちが座右の銘として掲げるのが『論語』をはじめとする中国の古典だ。人生の壁に直面した時、中国の古典は実に明快な答えをくれる。「ぶれない自分」を作り、人間性を養うという意味では大いに役立つ。人と人との信用で成り立つビジネスの世界では、人間力そのものが問われるからだ。

様々な古典書があるが、私がビジネスパーソンの皆さんにまず読んでほしいのは『論語』『老子』『孫子』の3つ。『論語』は儒教の始祖である孔子と弟子たちとのやり取りを記した書で、人を率いるとはどういうことか、人間としてどう生きるべきかなど人生の指針を学ぶことができる。どちらかというと人生上り坂の時に読むといい。逆に、落ち込んだ時に読みたいのが『老子』。自分の原点に立ち返り、「また一から頑張ろう」と、気持ちを奮い立たせてくれる。そして、具体的に人生をどう切り開くか、企業戦略をどう立てるべきかを示してくれるのが『孫子』だ。

現代の企業社会の事例と結びつけて書かれ、頭に入りやすい。入門書で中国古典の世界になじみ、その素晴らしさを理解したら、それぞれの原文に挑戦してみよう。例えば『老子』なら、元京都大学名誉教授の福永光司さんが書いた『老子——中国古典選朝日選書』などがお薦め。原文やその直訳に触れると、解説書では得られない、エネルギーのほとばしりのようなものが直接感じられる。中国古典は全部を理解する必要はなく、ばらばらと読み、「所々分かる」程度でOK。最初は「何となく分かった気になる」ことが大切なのだ。

もう少し深掘りするならステップ2の『大学・中庸』を。「大学」と『中庸』は本来別々の書で、『論語』『孟子』と並んで「四書」と呼ばれる中国古典の代表。岩波文庫のこの本も原文と直訳から成るので、オリジナルの魅力が堪能できる。さらに、別の角度から中国古典の魅力が発見できる左の4冊もぜひ読んでみてほしい。遠い存在だった中国古典が身近なものとして感じられるようになるはずだ。